

文字もじ MOJI の世界

27. 文字情報技術促進協議会

小林龍生*

2019年7月、従来任意団体として活動してきた文字情報技術促進協議会（CITPC）は、一般社団法人として新たなスタートを切った。

CITPC¹⁾は、当初、IVS技術促進協議会という名称でスタートした。当時、キーエンスに買収されたジャストシステムとの、コンサルタントとしての契約が終了したばかりに、日本マイクロソフトのCTOだった加治佐俊一さんが、「わたしがマイクロソフトにいる間に、日本語のためにできることを何かやりましょう」と、声を掛けてくれたのがきっかけだった。

実際の準備は、加治佐さんの右腕、田丸健三郎さんを中心に進められた。当初の中心メンバーは、主要フォントベンダー、ワープロやDTPのアプリケーションベンダー、大手印刷会社など、フォントの開発や利用に直接関わる企業が中心だった。アドビが、IVD（Ideographic Variation Database：Unicode Consortiumが管理している異体字データベース）に、AJ1（Adobe-Japan 1）コレクションを登録したばかりで、IVS（Ideographic Variation Sequence：基底文字に対してさまざまなグリフイメージ、異体字を使用可能にする技術）やIVDの業界一般での認知度は、すこぶる低かった。

それでも、設立準備のために集まったメンバーは、みな、心の底から、当時の日本の社会生活上必要と目される漢字字体の使い分けに係わる十分な技術環境を、何とか改善したいという熱い思

いを持っていた。なによりも、そのような共通の思いを、同業他社や異業種のメンバーと、腹藏なく話し合える機会を持てたことが、この上なく喜ばしいと感じているように見受けられた。そう、メンバーは、みんな、日本語と日本語のフォントが大好きだった。

このような仲良しクラブ的な同志意識は、協議会が正式に発足した後も、いい意味で継承された。各部会の会合の後や、年に2度ほど催される懇親会の盛り上がり方は、まるで学生サークルの飲み会のような有様になる。この盛り上がり学生サークルと異なる点があるとすると、嬉々として話し合われている内容が、どこまでいってもフォント技術のことであり、時にそれが、直接的なビジネスの話に展開する、といったあたりだろうか。

「文字情報技術」へ

IVS技術促進協議会の最初の転機は、独立行政法人情報処理推進機構が、内閣府、経済産業省とともに推し進めてきた文字情報基盤整備事業（MJプロジェクト）が峠を越え、IVDにMJ（文字情報）コレクションとして登録されたあたりに訪れた。それまで、AJ1コレクションを中心に、民間の、それも主として印刷・出版業界の需要への対応を中心に進められてきた調査・研究のフェイズから、MJコレクションの中心的ユーザーとして想定される官公庁や地方自治体への普及活動に、軸足が変化することとなった。このタイミングで、NEC、日立などのシステムインテグレーションを主軸とする企業の参画を得ることができた。協

1) CITPC：Japanese Character Information Technology Promotion Council

議会の名称も、IVS 技術に限定せず、より幅広く文字コードやフォント関連技術に対応する決意を込めて、文字情報技術促進協議会と改められた。

協議会の名称を IVS といういささか専門的な匂いのする名称から、一般的な文字情報技術という名称に変更したこと、MJ プロジェクトの一般への普及に積極的に取り組む姿勢を明確にしたことで、協議会の活動の幅は、飛躍的に広まった。その直接的な成果は、港区、大田区、船橋市、石巻市などの自治体が、賛助会員として参画してくれたことだろう。それも、単なるお客さんではなく、部会やセミナーに積極的に参加し、協議会の運営に主体的に係わってくれている。

今までなかった組織に

協議会を法人化する、という議論が始まった背景には、このような協議会の順調な発展が背景にある。

振り返ってみると、当初、フォントベンダーや DTP、ワープロソフトのアプリケーションベンダーなどの小さい仲良しクラブから始まった協議会は、印刷関連業界、システムインテグレーターや自治体をも巻き込み、フォントと日本語関連の情報処理に係わるほとんどすべての業態、ユーザーを開発者側と利用者側を問わず、横断的に網羅する、日本には今まで存在しなかったまさに業際的な組織に育っていた。

そして、協議会の内外から、このような独自の立ち位置を生かした、より深みのある調査研究プロジェクトや協議会メンバーのビジネスにつなが



* KOBAYASHI, Tatsuo
文字情報技術促進協議会会長
tlk@kobaysh.com

るような事業の受け皿となる組織体を目指して欲しい、という要望を多く耳にするようになった。

事務局長を務めてくれているマイクロソフトの田丸健三郎さんを中心に、運営委員会の発議として、2017 年度末の理事会・総会において、一般社団法人化を目指す方向性が承認された。

とはいえ、一般社団法人化に向けた調査や事務手続きには、思いのほか多くの時間を要した。何よりも大きな困難となったのは、いわば仲良しクラブの域を一步も出ない任意団体と、定款を定めた上で法務局に登録することが必要な一般社団法人とでは、特に、組織としての意思決定のプロセスに大きな差がある、という点だった。

緩やかな合意でなんとなく運営していった任意団体と、定款に基づく明確な意思決定を前提とする一般社団法人とでは、どうしても、その運営プロセスに大きな違いが生じる。その切り替えの過程で、ホームページの更改や新会員の受け入れなどを得なかった。それどころか、形式的とはいえ、既存の会員にさえ、改めて一般社団法人への入会意思表示を求めることさえ必要となった。

個人的には、各部会の活動や、ぼくが関わっていたいくつかのプロジェクトが中断に追い込まれてみて、世間一般で言えば、定年の年齢を既にいくつも超えているぼく自身の生活の中で、協議会の活動が、どれほど大きな位置を占めていたかを思い知らされる結果となった。

利用者が使いやすいものに

2019 年 7 月、従来任意団体として活動してきた文字情報技術促進協議会は、一般社団法人として新たなスタートを切った。

折しも、2019 年 5 月に、新天皇の即位とともに、元号が令和と改められ、それに伴い、令和の合字に対応する UCS (Universal Coded Character Set : 国際符号化文字集合) やユニコードの符号位置を新たに確定するという国際標準化のプロセスが進められた。協議会との関連が深い、文字情

報基盤整備事業も、ISO/IEC 10646 ver.5 AMD (Amendment : 修正票) 2 が7月末に公開され、国際標準化という局面では、めでたく完了した。

拙著『ユニコード戦記』(東京電機大学出版局刊)の最後を、ぼくは、次のように結んでいる。

「情報通信技術の社会的責務についての認識を深める活動、標準化された符号化文字の実用的実装に向けた活動など、まだやらなければならないことは多々残されている。ぼくも、情報通信技術に携わる人間の一人として、また他の仲間たちとともに社会に対して文化に対して、やはり大きな責務を負っている。そして、それはまた、戦い半ばにして逝ったヒデキに対する相棒(バディ)としての責務でもある。」

『ユニコード戦記』を上梓したのが、2011年。任意団体としての協議会の設立が、2010年。

この文章を書いたとき、当時のIVS技術促進

協議会のことがぼくの念頭にあったに違いない。発足からほぼ10年を経て、協議会は、一般社団法人として、新たな一步を踏み出そうとしている。ぼくも、この協議会の活動を通して、少しは、責務を果たしてこられたのではないかと密かに自負している。

9月24日、新生一般社団法人文字情報技術促進協議会の発会記念を兼ねた懇親会が久々に開催された。品川駅近くの会場には、任意団体のところからのおなじみの顔ぶれに加えて、新しい顔ぶれもちろほら見受けられた。新しいメンバーも含め、乾杯の挨拶も早々に、いくつもの談笑の輪が広がっていった。そう、これが情報技術促進協議会なのだ。

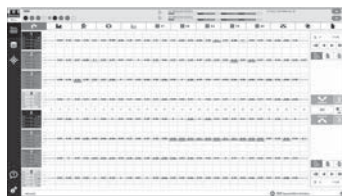
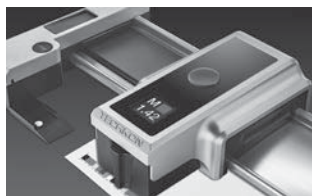
一般社法人情報技術促進協議会が、令和時代の情報技術を取り巻く環境を、文字情報技術の観点から、より利用者によりそった使いやすいものにしていく活動を進めていく活動の一端を担えれば、これにまさる喜びはない。 ■

Digital Information
InkZone

InkZoneカラーコントロール

既設のオフセット印刷機でインキキー自動補正を実現します。

印刷機の改造は不要 品質標準化 生産性改善



対応測定器 テシコン エックスライト プロスパーククリエイティブ グラフオメトロニック
枚葉・オフ輪 多くの印刷機メーカー モデルに対応

PROVALUE
(株)プロバリュー

大阪府枚方市岡本町 8-18-502
茨城県つくば市天久保 2-20-7
Tel 072-845-4981
URL <http://www.provalue.co.jp>